

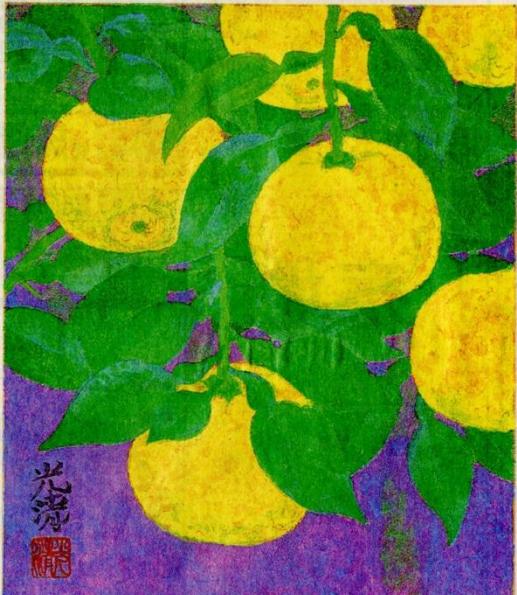
文化

ついでウイーンは誘惑の

■エキサイティング

私は越中の女の血を引く、結構意志の強い人間であると自負している。

本格的に音楽の道を志し、ウイーン留学を目指し始めたのは高校一年生の終わりごろだった。広い世界への憧れが強く、単身渡欧することに何の抵抗もなかつた私に対し、両親は当初猛反対。ただでさえ音楽の世界はよくわからないうに、一人娘を十七歳で海外へ送り出すとなれば当然だ。挑戦するのは一度だけ、高校三年生の夏にウイーン国立音楽大学ピアノ科を受験。背水の陣のような覚悟が良かつたのか合格した。



「祭りの柚子」 津幡 光清 (富山市)

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

人情厚い富山の人々

が、回を重ねるごとに選曲や

演出を熟考し、まさに地元の聴衆に育ててもらつた感がある。

ちなみに、これまで国内外

さまざまな土地で演奏したが、富山での演奏会ほどエキサイティングなものはない。

一度限りの場所とは違い、成長を見られる緊張感があるため鍛えられる。そして同時に温かさに、毎回終演後は目頭が熱くなる。

立山連峰のふもと旧大山町は母の出身地であり、私が住み始めたのは実は小学校五年生の終わりからだ。それまで

は二十七歳の時。大学院を修了して二年、親のすねはどつ

ぐにかじりつくしていったため、通訳や伴奏を掛け持ちしながら現地で就職のチャンスを窺っていた。ところが、ようやくオーストリアの音楽大学で伴奏助手のポストが決まりそうなどき、急に私の中に迷いが生じた。「本当にそれでいいのか? 本当はどうで生きていきたい?」:その答

えは長年住んだウイーンではなく故郷だった。

海外生活の疲れと年齢的に微妙だったこともある。育ててもらつた富山に還元する方法をまた一か

ウイーンから故郷へ 丸山 美由紀

多い町。命を賭す覚悟で音楽に身を捧げる者の集まりと、思いきや、ウイーンの学生は、え音楽の世界はよくわからないうに、一人娘を十七歳で海外へ送り出すとなれば当然だ。挑戦するのは一度だけ、高校三年生の夏にウイーン国立音楽大学ピアノ科を受

験。背水の陣のような覚悟が良かつたのか合格した。

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

当時は十代で海外へ行くことが珍しかったためメディアで報じられ、渡欧直前には壮行演奏会まで開いていただいた。県内各地から届いた数々の激励の手紙をスリーブケースに入れ、意気揚々富山空港を飛び立つた日のことは今も脳裏に焼き付いている。

私は越中の女の血を引く、結構意志の強い人間であると自負している。

えつちゅうさんか

越中守

校を卒業後、ウイーン国立音楽大学ピアノ科に入学し、二〇〇〇年同大学修士課程修了。マギスターの号を取得する。在学中から国内外で演奏活動。その間ラームズ国際音楽コンクールの公式伴奏者、ウイーン国立音楽大指揮科のピアノ演奏を務める。九年間の留学を経て二〇〇二年に帰国してからは、富山を拠点に数々のソロリサイタル、オーケストラとの共演、学校訪問コンサートなどの活動を行う。こどし四月から新潟県糸魚川市在住。



は転勤族の両親のもと、各地を転々としていた。

北日本新聞社は「越中夢みキャンペーン」の一環で、一月を自慢する会の会員を募集中です。

越中の魅力を発信

として特製の名刺をくりを進め、会員に手に、思い思いの越中自慢でもらいファンの拡大を図ります。

越中守募集

■立山を見て散歩

帰国後すぐに結婚し、妊娠出産と慌ただしかったが、ブランクを置かずに演奏活動を続けることができた。これは家族の協力、周囲の方々の援

助なしには不可能であった。律儀で人情の厚い富山の人々に感謝しながら、今後はもう少し歩くことを決意した。特に次世代を担う、愛しい富山の子どもたちには、音楽でどんどん感性を豊かに

してもらいたいと願つてい

る。

は二十七歳の時。大学院を修了して二年、親のすねはどつぐにかじりつくしていったため、通訳や伴奏を掛け持ちしながら現地で就職のチャンスを窺っていた。ところが、ようやくオーストリアの音楽大学で伴奏助手のポストが決まりそうなどき、急に私の中に迷いが生じた。「本当にそれでいいのか? 本当はどうで生きていきたい?」:その答

えは長年住んだウイーンではなく故郷だった。海外生活の疲れと年齢的に微妙だったこともある。育ててもらつた富山に還元する方法をまた一か